

〔論文〕

思い出の中にある将来

—ユダヤ民族の歴史と詩編90編の時間性—¹⁾

黒柳志仁

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

本稿は詩編90編を取り上げ、永遠（עולם）をキーワードにヘブライ語の時間性をまとめたものである。

神と人間の関係の中で描写された時間性は、旧約聖書の中で多様である。古代から時間は、日々の生活と歴史をつなぐ架け橋であり、人に死生観や生きる知恵を与える教えでもあった。本稿ではユダヤ民族の歴史を概観し、未来へ向けられた期待を表す場合、回想、記憶といった人間の思い出（זכר）は、同時に将来を示す希望として詩編の時間性に描写されていることを紹介する。

キーワード：詩編、永遠、時間、思い出

Future in Memories: The Concept of Time in Psalm 90

Yukihito KUROYANAGI

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

1) 本稿は2013年11月4日に関西学院大学で開催された日本旧約学会（秋期）と2014年7月19日に日本聖公会神戸聖ミカエル教会で行われた神戸教区神学塾（全4回）の資料に加筆、修正したものである。

発行日 2016年3月31日

1. はじめに

1.1 詩編90編の類型

私たちは日常の生活の中で、どのように情報を得ているだろうか。例えば周りにいる人々からの話、テレビ番組、映画、ゲーム、音楽、スポーツ、ライブ、写真、メールアプリなど様々だろう。そうした情報の内容は、形態や類型の観点からすると実に多くの複合体からなっている。政治、経済、社会、スポーツ、歴史、エンターテインメントなどによって文体は異なり、話者や記者の个性的特色も見られ、個々のジャンルの特性を生かしながら人々に伝えている。そして伝達するという大きな目的がある。同じように旧約聖書に記された詩編も、実に多くのジャンルから構成されており、人が生きる上で大切な事柄を今日に伝えている。

詩編は150編から構成されており、文学類型研究において「知恵の詩編」という分類がある²⁾。「知恵の詩編」に文学類型される特徴の一つとして、人間と時間との関係がある。過ぎ去る時間性と今を生きる祈る者との間で生み出される教えである。詩編90編は「知恵の詩編」の一つに類型される視点があり、人々に新しい生き方を伝達する教えとして、知恵のはたらきが時間性の関わりの中で記述されている³⁾。

特に詩編90編の中には創造思想、人間は短命である教え、予測不可能な神の怒りによる義人思想、人間の嘆き、神の哀れみへの嘆願など、テキスト全体から時間を表現するヘブライ語や詩歌の時制を通して、人間の生きる知恵が描かれている。作品全体を通して感じられる「はかなさ」という意味を表す言葉はヘブライ語にはないが、詩編90編には、移り変わる草木などの自然をテーマにした描写の中で主題にされており、後にヘレニズム思想の影響を受けて記述されたコヘレトの言葉の中には「そよ風」というヘブライ語の言葉を使って人間が生きる上での知恵を書き残している。コヘレトの言葉の中にも、時間性と知恵の関係を主題にした記述が多くあり、「はかなさ」を主題にする記述には、1. 計測不可能な神の「大きさ」を眼前に人は数えられ得る短い人生を歩む教え、2. 喜びの経験を準備するための呼びかけ、3. 詩編の中では人間の罪を猶予する比喩として、人間の心に記憶する知恵の教えになっている⁴⁾。形あるものは過ぎ去るが、形なきものの力強さに価値をおく思考が、古代ユダヤ民族の生きる知恵として描かれている。以上の視点を踏まえつつ、現代を生きる私たちに問いかける詩編に描写された時間性について考察を深めることにする。

1.2 詩編を聞く

詩編には「賛歌」「嘆きの歌」「感謝の歌」「王の詩編」「知恵の詩編」「歴史詩編」などの文学

2) vgl. ZENGER (Hrsg.), *Einleitung in das Alte Testament*, 8. Aufl., 354.

3) vgl. GUARDINI, *Vergänglichkeit. Psalm 89 (90)*, in: Ders. (Hrsg.), *Weisheit der Psalmen: Meditationen*. 2. Aufl., 127; WAHL, *Ps 90, 12: Text, Tradition und Interpretation*, ZAW 106, 121; KAISER/LOHSE, *Tod und Leben*, TB 1001, 8f.

4) vgl. KUROYANAGI, *Vergänglichkeit des Menschen und Gottes Zeit*, 150.

類型があるが、全体として詩編1編のアシュレー「אשרי (幸い)」という祝福のキーワードを聞きながら、嘆きのときも、悔い改めのときも、メッセージを聞く、という方法にある。

詩編という名称はヘブライ語ではテヒリーム「תהלים (賛歌)」を意味し、ギリシャ語ではプサルモイ「ψαλμοι (弦の伴奏による歌)」を意味する。日本語聖書ではそれらの言葉の意味から、「詩編」と訳されているが、こうした賛歌や弦の伴奏による歌というイメージから、この書物を開く必要がある。音には感情を増幅させるはたらきもあり、詩編を伝える言葉もまた、本来は音声である。声に出して読み、語り伝えるためには、発声、発音、アクセント、リズムなどの音声表現に付随する韻律要素を含んでいる。今日の教会礼拝の中にある賛美歌のように、ユダヤ民族も同じように神を賛美し歌うことで、祈りを暗記することも重視してきた。祈りは歌へと通じ、旧約聖書全体を通して様々な楽器が登場している。嬉しい時も悲しい時も、神に向かって歌った歴史も、詩編を作り出したのである。

詩編は全体を通して、パラレリズムを基盤としている詩文体であるので、音節の区切りによって、同義的パラレリズム、反意的パラレリズム、総合的パラレリズムを考察することが求められる。詩編は、ユダヤ民族の言葉によって歌われ、イエスを通してキリスト教にも伝承された書物の一つである。旧約聖書に記された詩編は、神を賛美するための歌として、太古から伝わっていた伝承を、地域の慣習や言語にしたがって伝え続けてきたのである。それらが聖書として編纂後は、文献でなく、それが聖典であることにより、翻訳上、別の要素が要求されている。つまり伝承の上でも聖典であるために荘厳な文章にしなげなければならない、儀礼に用いられるためには、聴覚的に流麗でなければならない。または伝道の書として、視覚的な読みやすさも要求されただろう。聖典の翻訳とは、歴史の中に表された文化や信仰を照らし出すことになる。それらが今日の日本語にも聖書としてもたらされたと考えなければならない。

今日の私たちが「詩編を聞く」ことに求められるのは、聖書全体に書かれている言葉を手がかりにして、使信を異なる民族、文化、時代の言語に移すとき、単なる「言い換え」ではなく、言葉の対象となり、言葉が表現しようとした同じ価値をなす事物や事柄を探り求めることが必要となる。

2. 詩編90編の構成

詩編90編の構成は以下の3枠によって構成されている⁵⁾。1枠:1b-2節を「信仰告白」、2枠:3-12節を「人間のはかなさについての嘆き」(小枠A:3-6節「全ての人間の短い命の教え」、小枠B:7-12節「継続する神の怒りの経験に対する嘆き」)、3枠:13-17節を「神の哀れみにおける僕の懇願」である。1枠については特に詩編90編の創造思想の特徴として、1. 世の主としての神の褒め称え、2. 世を創造した太古のはじまりとして影響を及ぼす神への呼びかけ、3. 神の創造に対し驚嘆する人間の立場について描かれている。2枠については「日」「月」「朝」「夜」といった時間陳述

5) vgl. HOSSFELD/ZENGER, *Psalmen 51-100*, HthKAT, 606.

を通して表現される人間の「はかなさ」の主題について、神の怒りのはたらき（1. 神と人の隔たりの知覚, 2. 人の罪における神の反応としての答え）との関係である。3 枠については特にヘブライ語の יָמֵי מְדוּמָה 「いつまで」捨てておくのか、といった言い回しに見られる嘆願の特徴がある。私たちの「罪」のゆえに、「あなた（神）」の怒りを招いて滅びる「われら（人間）」のことを思い直して慈愛によって、私たちの行いを確かなものにしてほしい願いが詩編90編の祈りには描かれている。

3. 詩編90編の翻訳と構成

節	翻訳	構成
1節	神の人 モーセの祈り 主よ、あなたはすでに <u>代々にわたって</u> 私たちのための隠れ家でした。	【1 枠：1b-2 節 信仰告白】 1b-2.17 節：神の呼びかけ [1.16 節：世代の移り変わりの表明]
2節	山々が生まれ、あなたが大地と世界を産み出される前に、 <u>果てしない時から果てしない時まで</u> 、あなたは神でした。	1b 節：代々 וּדְוָר וּדְוָר と 3c 節：アダムの子ら בְּנֵי אָדָם は 13.16 節と関連
3節	あなたは人々を塵に <u>返し</u> （いつも繰り返し）言います。 <u>帰れ</u> 、 <u>アダムの子ら</u> よ。	《小枠 A：3-6 節「全ての人間の短い命の教え」》 【2 枠：3-12 節 人間のはかなさへの嘆き】
4節	<u>1000年</u> はあなたの目には、過ぎ去るとき、 <u>昨日</u> のようで、そしてまるで <u>一夜の夜警</u> （のよう）です。	3 節：塵に「返る」は、13 節と関連 3b 節：アダムの子「 בֶּן 」は 13.16 節「しもべ עַבְדֶּיךָ 」に関連
5節	あなたが彼らに眠りに浴びさせると、彼らは朝には（いつも繰り返し）うつろう草のようになります。	4 節：「1000年」は「日」と「夜警」に時間的対比
6節	朝には花を咲かせて、うつろい、 <u>夕べ</u> にはしおれ、そして枯れていきます。	5b. 6a 節：「朝」は 14 節に関連「神の助け」の比喩。
7節	私たちはあなたの <u>怒り</u> を通して過ぎ去り、そしてあなたの <u>憤り</u> を通して私たちは怯えました。	6a. 6b 節「朝」「夕」の対比 《小枠 B：7-16 節「全ての人間の短い命の教え」》
8節	あなたは私たちの罪をみ前に置かれました、あなたの隠された事々はあなたの顔の光の中に。	7-12 節：「継続する神の怒りの経験に対する嘆き」 7 節「怒り אַף 」「憤り חַמָּה 」と 9 節「怒り עֲבָרָה 」で神の怒りの表明
9節	すべての私たちの日々はあなたの <u>怒り</u> の中に、私たちの年々はため息のように消えます。	7.9 節の怒りの体験は 11 節「怒り אַף 」「激怒 אַף עֲבָרָה 」と関連
10節	私たちの年々の日々は 70 年、健やかであっても 80 年、それらの荒々しさは、労苦と災いです。それは <u>瞬時</u> に過ぎ去り、わたしたちは消え去ります。	8 節「罪」 9 節「日」「月」「瞬時」の時間的対比
11節	誰があなたの <u>怒り</u> の力を <u>知る</u> のですか？ あなたの恐れに応じてあなたの <u>激怒</u> を？	11 節：「怒り」「激怒」は 7.9 節と関連

12節 <u>私たちの日々</u> を数えることを、私たちに <u>教えてください</u> 、そして私たちは、一つの知恵の心をもたらずでしょう。	12a節：願い 12b節：願いの目的（知恵）
13節 <u>戻って</u> きてください、主。まだあとどのくらいですか？ そしてあなたの <u>しもべ</u> をあわれみください。	【3枠：13-17節 神の哀れみにおける僕の懇願】 13-16節：神の慈しみの願い
14節 <u>朝</u> には私たちがあなたの慈愛で満たしてください。そして、私たちは <u>喜び</u> 、すべての <u>私たちの日々</u> を喜びたいのです。	13節：「戻る」は3節と関連 14節：「朝」は5b, 6a節と関連
15節 <u>私たちの多くの日々</u> を喜ばせてください、あなたが私たちが苦しめた、私たちが罪に遭った（多くの） <u>年々</u> を。	14.15節「私たちの日々 כְּלַיִמֵינוּ」「私たちの多くの日々 כִּימֹת」は9.10節「私たちの年々 שָׁנוֹת」10節に関連
16節 あなたのしもべにあなたの行いが現されるように、そしてあなたの栄光がその子らに。	16節：「あなたのしもべ עַבְדֶּיךָ」は3c節「子 בָּנֶיךָ」に関連 [16節：世代の移り変わりの表明]
17節 私たちの神、主の喜びが私たちに臨むように、そして私たちの手の行いが堅く据えられるように、そして私たちの手の行いが堅く据えられるように。	17節：祝福

4. 詩編90編の時間性

詩編はヘブライ語単語にも、詩文体によるパラレリズムの意味相関、そして賛美という主題を通してヘブライ語時制で修飾して描写されているため、様々な表現や意味を含むことが特徴である。詩編90編2節に新共同訳聖書では「世々とこしえに（מְעוֹלָם עַד־עוֹלָם）」と訳されている箇所がある。2節は神への信仰告白を表す箇所、ヘブライ語オラーム（עוֹלָם）によって表現されている。この単語の原義は「継続」で旧約聖書において「終わりなき持続」として理解される⁶⁾。旧約聖書では「永遠」という無時間の概念はなく、神は永遠であるということは、神がいつまでも持続するという意味で捉えられている。このオラームは詩編の中でも特に賛美の歌の中で、多くの箇所で使用されている単語である⁷⁾。詩編90編も多くの時間性を用いたヘブライ語単語によって陳述されている。「昨日（יּוֹם אֶתְמוֹל）」（4節）、「私たちの日々（יְמֵינוּ）」（9, 10, 12, 14節）、「多くの日々（כִּימֹת）」（15節）、「年（שָׁנָה）」（10節）、「年々（שָׁנִים）」（4節）、「私たちの年々（שָׁנֵינוּ）」（10節）、「年々（שָׁנוֹת）」（1節）、「1000（אַלְפַּיִם）」（4節）、「そして「継続（עוֹלָם）」（2節）である。これらの時間性は詩全体を通して、「日」から「年」そして「継続」へと時間的な長さが増していることがわかる。2節における神への信仰告白に記された「継続（עוֹלָם）」は、「מְעוֹלָם עַד־עוֹלָם（継続から継続まで）」という言い回しの中で記されている。その時間表現は、「山々が生まれ、あなたが大地と世界を産み出される前」から継続する神による創造の行いを表現する「空間的な広がり」をも意味している。「עוֹלָם」は「見渡すことができない果てしない継続」または「限りない継続」

6) vgl. JENNI, עולם *Ewigkeit*: THAT II, 228.

7) vgl. JENNI, a.a.O.

を表現するのである。代々にわたり民を守るイスラエルの主を賛美し（1節）、この大地と世界が生み出される前から存在する創造者としての主を褒め称える（2節）という2行から詩歌がはじまり、人の生涯の短命さと、この詩を口にする者の生涯における労苦と災いが、神の怒りのみ手の業であることを告白している。詩編90編における時間性は、人と時間の関わりの中に、この詩の神学が関わっている信仰の問題として示す仕方、詩全体に編み込まれている。

詩編における賛美の歌で「עולם」は、「神の大きさ」とも表現できる⁸⁾。見渡すことのできない果てしなさを、限りなき神に惹かれる躍動を「果てしない時」として表現している。詩編90編では、そうした「神の大きさ」は人間の短い生との対比で相対化され、空間的な要素を含み、賛美の中に記述されている。以上から指摘できることは、「עולם」は「日（יום）」「月（שנה）」のように抽象的な時間概念として理解されるのではなく、相対的な時間理解をもたらす言葉なのである。

5. 詩編とユダヤ民族の歴史

5.1 詩編の成立時期

既述のように詩編における「עולם」に表された神の大きさとも表現できる「果てしない時」とは、具体的にどのような相対的時間理解をもたらしたのだろうか。ユダヤ民族の歴史から概観しておきたい。

旧約聖書は、古代ユダヤ民族が長い歴史の中で様々な文書を集めたものである。旧約聖書の内容は紀元前13世紀から紀元後1世紀くらいの時代とされている。中でも詩編の成立年代は、紀元前10世紀から紀元前587～538年のバビロン捕囚時代を経て、現在の詩編が最終的に編集成立したのは紀元前200年頃とされる⁹⁾。詩編が成立するまでに、ユダヤ民族は1. 出エジプト（紀元前13世紀）、2. ユダヤ民族独立の時代（紀元前12-6世紀）、3. ユダヤ民族が自分たちの国を失いバビロン捕囚の時代（紀元前6世紀以降）という主に3つの歴史的背景がある¹⁰⁾。

紀元前13世紀頃、ファラオ王の統治下でエジプトの奴隷とされていた非エジプト系の人々が、モーセに率いられて十戒を順守しエジプトを離れ、神がアブラハムとその子孫に与えると約束した地カナンに向かう「出エジプト」の出来事によって、初めて神と人との間に契約が交わされる。ここに初期ユダヤ民族の集団が成立したとされる。半世紀の間、荒野での厳しい生活をする中でも、民族が減びずに存続できているのは神が出エジプト以来守ってくださるという信仰である。神と民の関係は、神が民を選び、民は神との契約の中にあるという選民関係にあったのである。初期ユダヤ民族は、定住生活をしていないが、紀元前12世紀からカナンの地で味方となる者を加え十二部族が成立し、パレスチナに定住し自分たちの国（部族連合国）を作る。紀元前11世紀後半から紀元前10世紀後半にイスラエル統一王国が成立し、サウル、ダビデ、ソロモンの時

8) vgl. HARTENSTEIN, *Die Unzugänglichkeit Gottes im Heiligtum*, 230.

9) 紀元前180年前後に成立した旧約聖書シラ書が現在の詩編の内容を知っていたと考えられる点による。
vgl. SCHMIDT, *Einführung in das Alte Testament*, 4. Aufl., 299.

10) vgl. OTTO, *Der Gott des Alten Testaments*, Teil 1, 126.

代になる。ところが紀元前932年頃にイスラエル統一王国はソロモンが亡くなると、南北に分裂することになる。この分裂によってユダヤ民族は信仰の上で、大きな変化が生じることになる。それは国々に分裂することで、民族の信仰対象が一つの神を崇拝するのではなく、崇拝対象が多様になり、多神教的傾向になった¹¹⁾。出エジプトの出来事によって契約を交わした神がいなくなるということだけでなく、他の神々の崇拝も行われるようになったのである。信仰の中で多神教的な態度が生じるのは、人が神を選ぶことができるという立場でもある。国の分裂はユダヤ民族にとって、神との関連においても現世利益をもたらすような様々な神々と結びつく信仰者もいたのである。その後、紀元前722年頃にメソポタミアのアッシリア帝国によって、北王国が滅ぼされ南王国が残る。国が滅びるという出来事は、ユダヤ民族にとって、神が国を守ってくださらなかったことを意味する。この出来事は、神を見捨てる者たちと、それでも神に忠実であり続ける者たちに分かれた。神に忠実である者たちは、民族神の再理解と、民族としての再結束の経緯の中に、一つの神を求めていく単一信仰を成り立たせた。DOHMENはこの時代のユダヤ民族に単一信仰が成立する過程で、神の契約における罪のあり方を次のように指摘している。「ユダヤ教の罪(ⲓⲁ)は、人間存在の本来のあり方ではなく、神の意志を否定していることである。罪の状態とは、神の前で民族が適切な状態にないことを示している」¹²⁾。神と民族の間に契約が成立していたのに、神に民族が背いたとき、民族の行為は罪となる。自分たちの国を失ったとしても、神の前でどのような態度をとるべきか、単一神への信仰は、民族のアイデンティティの再構築にもつながったと言える。その後、紀元前587年、ユダヤ民族の南王国はバビロニアによって滅ぼされ、完全に独立国を失ってしまう時代になった。生き残った者たちは、バビロニアの主都バビロンに連行をされ捕囚生活を送ることになる。バビロン捕囚は紀元前587年から紀元前538年の49年間続き、ユダヤ民族は奴隷状態の日々を強いられることになった。このようにユダヤ民族の歴史は、エジプトを脱出して以来、放浪生活から定住生活に入り、自分たちの国を作るものの分裂し、安定していないことがわかる。民族としてのまとまりは維持しようとするが、民族独立の確保、再現、統一の維持といった勢力の支配下にあったのである。詩編に書き残された詩歌の歴史背景は、概観したような紀元前10世紀のイスラエル統一王国が南北に分裂した時代から、紀元前6世紀のバビロン捕囚後とされている。

5.2 詩編とユダヤ民族の思い出

既述したように紀元前6世紀、ユダヤ民族はバビロンで奴隷状態にあり、捕囚状況下において、

11) 北王国のオムリ王朝(紀元前884-867)では多神教を推進する政策もあった。崇拝の対象となった神として「雲の神」「雨の神」である「バアル」(古代パレスチナやシリアで崇拝された豊穡の神)、「豊穡の女神」である「アスタルテ」(別名イシュタル、アシュラ:古代中東で崇拝された豊作をもたらす大母神)など、人々の生活に直接的な利益を与えてくれる神々が対象になった。vgl. HARTENSTEIN, *Das Angesicht JHWHs*, 271; JANOWSKI, *Konfliktgespräche mit Gott. Eine Anthropologie der Psalmen*, 2. Aufl., 163.

12) DOHMEN, *Exodus 19-40*, HthKAT, 292.

一体何が彼らの「救い」になったのだろうか。人々に救いをもたらしたものは何であったのか。この時代の状況を知ることのできる詩編137編を取り上げておく。「バビロンの流れのほとりに座り/シオン(エルサレム)を思って/わたしたちは泣いた。豎琴は/ほとりの柳の木々に掛けた。/わたしたちを捕虜にした民が/歌を歌えというから。/わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして/『歌って聞かせよ、シオンの歌を』というから」(詩編137編1節以下)。異郷の地バビロンで、嘲る民から歌うことを強要されていても、自分たちの故郷であったエルサレムのことを思い出し、いつか神は助けてくれるという希望を持ち続けたことがわかる箇所である¹³⁾。捕囚の中にあったユダヤ民族にとって、神は助けにならなかった、とはならなかった。神との関係を表現するすべてのものを失った時、残っていたのは、「思い出」であったのである。昔の出来事を思い起こし、自分たちの記憶に生かされ、その思いを歌とともに回想したのである。形あるものは過ぎ去るが、形なきものの力強さに価値をおく思考が、人々の思い出となり歌になっているのである。

ユダヤ民族は独立国を作るものの、分裂をする歴史が繰り返される中で、どのような歴史が、民族の救いの日、よりどころとなる出来事であったのか。それは「出エジプト」の出来事だったのである¹⁴⁾。出エジプトの出来事によって、神が私たちの祖先を救ってくれた。今、自分たちは奴隷状態にあるが、民族の救いの「思い出」が民と神をつないだのである。その過去の救いの出来事は、「第二の出エジプト」が生じるのではないか、という民族の未来を示す証になったのである。ユダヤ民族が自分たちの過去の「思い出」を歌う詩編の箇所を次に取り上げてみる。「神よ、我らはこの耳で聞いています/先祖が我らに語り伝えたことを/先祖の時代、いにしえの日に/あなたが成し遂げられた御業を」(詩編44編2節以下)。「わたしは主の御業を思い続け/いにしえに、あなたのなさった奇跡を思い続け/あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら/あなたの御業を思いめぐらします」(詩編77編12節以下)。「わたしはいにしえの日々を思い起こし/あなたのなさったことをひとつひとつ思い返し/御手の業を思いめぐらします」(詩編143編5節以下)。思い出を意味するヘブライ語の「思う(זכר)」には、「思い出す」「熟考する」「黙想する」「記す」「明らかにする」などの意味がある。その「思う(זכר)」は「いにしえ」の日々を思い出すことが書かれている。「いにしえ」とは「時間的にはるかに隔たった時代」「過ぎ去った頃」といった意味がある。私たちは過ぎ去った時間として理解をしている。ところが、この「いにしえ」を意味するヘブライ語のミケデム(מִקְדָּם:מִן + קִדְּמָה)は「前にある」という意味がある¹⁵⁾。『「前にある」(מִקְדָּם) 日々を思い出し、あなたのすべての御業を思う』のである(詩編143編5節)。日常私たちは過去について、すでに過ぎ去った時間、経験として捉えていると思うが、ユダヤ民族が書き記したヘブライ語の中では、過去を「前にある」現実と捉えているのである。この時間性についてドイツのWOLFFは旧約聖書の時間概念について次のように指摘している¹⁶⁾。「ミケデムという言葉によって表現される未来は、私の後ろからついてくるものであり、背後にあるものである。

13) バビロン捕囚期の預言集としては、イザヤ書44-55章(第二イザヤ)、エレミヤ書31章などを参照。

14) vgl. KOCH, *Qādām*, in: Rohls/Wenz (Hrsg.), *Vernunft des Glaubens*, 265.

15) vgl. KOCH. a.a.O. 267.

16) WOLFF, *Anthropologie des Alten Testaments*, Bd. I, 7. Aufl., 134ff.

同じような見方をとる *vorfahren*『先に行く人々』, *Vorfahr*『先祖』や *Nachfahr*『子孫』といった、ごく狭い範囲のドイツ語慣用もある。人間はちょうどボートの漕ぎ手のようなもので、未来の方へ背を向けて、時間の中を漕いでいく人に似ている。つまり彼は、彼の前に見えているものによって方向をとりながら、目標に到達する。この目前に姿を現した歴史が、彼に未来の主を証するのである」。将来は、過去の歩みの中に表されており、思い出を自分の前にある現実として見つめ、思いめぐらすことで、これからの歩むべき方向を確かめながら未来に到達するのである。このような過去の歴史と経験が、同時に自分たちの未来を指し示してくれるという時間性が、詩編に見るユダヤ民族の詩歌に表されている。

ユダヤ民族の先祖から語り伝えられたこととは、その先祖たちが経験をした神の救いの御業である出エジプトの出来事である。この出来事は信仰の基礎となり、主である神の御業として語り継がれ信仰告白してきた¹⁷⁾。先祖たちの時代は、「原初の時代」と表現される¹⁸⁾。この「原初」とは、ただ「時間の初め」という意味だけではなく、恒常的な意味で「繰り返し実現されるもの」としての時間理解である¹⁹⁾。詩編に次のような詩歌がある。「わたしは主の御業を思い続け/いにしえに、あなたのなされた奇跡を思い続け/あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら/あなたの御業を思いめぐらします」(77編12節以下)。神の御手によって現された御業が、ユダヤ民族の子孫にとって神を心のよりどころとする根拠となる。思い出の過去が、同時に未来を証する道標になったのである。

バビロン捕囚から半世紀後、ユダヤ民族の運命が動く出来事が生じる。バビロニアがペルシャ帝国(アケメネス朝)のキュロスに滅ぼされたのである。キュロスは寛大な政策を取り、ユダヤ民族(約5万人)を故郷エルサレムに帰すことを許した。そこでユダヤ民族は20年をかけてエルサレムで新たな神殿の建設をはじめた。

バビロン捕囚下にあったユダヤ民族は、奴隷の身であったものの、一方でバビロンの異文化、新しい文化に触れる歴史でもあった。ユダヤ教においてバビロン捕囚期を通して生じた信仰上の変化として、それまで神は「民族神」と捉えていたが、唯一の「創造神」という神理解へと変化していくのである²⁰⁾。紀元前6世紀の捕囚期後から編纂される律法(トラー:תורה)が、今日のユダヤ教の聖典である。この律法には、天地創造から出エジプト、モーセの死までを物語る歴史物語まで、民族の歴史、生活の掟が書かれている。旧約聖書では「モーセ五書」である創世記から出エジプト記、レビ記、民数記、申命記までの書物がその内容である。しかしユダヤ教において、なぜ生活の掟だけでなく、天地創造の物語、出エジプトのモーセ物語なども律法という「法」のカテゴリーに収めたのだろうか。出エジプトから荒野の旅、カナン定着、ダビデ王国成立までの歴史を振り返る歴史詩編である78編のはじめには次のように書かれている。「わたしの民よ、

17) vgl. WOLFF, a.a.O.

18) イザヤ書37章26節「はるか昔」、ミカ書7章20節「その昔」、ネヘミヤ記12章46節「昔の時代」と新共同訳聖書で訳されている。

19) vgl. WILLI-PLEIN, *Am Anfang einer Geschichte der Zeit*, ThZ 53, 156.

20) vgl. OTTO, *Der Gott des Alten Testaments*, Teil 1, Göttingen, 113f.

わたしの教え（トラー）を聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ」（1節）。「主はヤコブの中に定めを与え/イスラエルの中に教え（トラー）を置き/それを子孫に示すように/わたしたちの先祖に命じられた」（5節）。「彼らは神との契約を守らず/その教え（トラー）に従って歩むことを拒み/その御業をことごとく忘れた/彼らに示された驚くべき御業を」（10節以下）。詩編の中だけでもトラーという単語が37回使われ、神の歴史的行為に関する伝承を語り伝えることがトラーであることを示している。「古代イスラエルでは両親、長老、知者、祭司、預言者たちは、教訓や警告などを『法』の類型にかぎらず、じつにさまざまな形態の言語表現を用いて語ったが、それらは神の意志とそれにふさわしい生き方を指し示すかぎり『トラー』と呼ばれ得たのである²¹⁾。トラー (תורה) には「指示」「教示」という幅広い意味を含んでおり、創世記から歴史物語までが律法として、ユダヤ民族の聖典の核ができたのである。

5.3 詩編の時間性とヘレニズム文化

紀元前4世紀にマケドニアのアレクサンドロス（アレキサンダー大王）が東方遠征を行い、ペルシャ帝国は滅ぼされ、エジプト、インドにまで支配が及んだ。ユダヤ民族の地エルサレムも再び占領されることになる。この出来事は、文化と文化の衝突でもあり、制圧された地には哲学、芸術などギリシャ文化が入り、ヘレニズム文化が生まれた。各地にシナゴーク（ユダヤ教礼拝堂）が作られ、ユダヤ民族は律法を学んだのである。各地に広がっても、ユダヤ民族が存続できたのは、苦しいときも律法によって支えられ、彼らが律法を尊重していることで団結したのである²²⁾。ユダヤ民族はこうした時代の中で、知恵文学を生み出していく。旧約聖書に記されている諸書もまた、ヘレニズム文化の中で、社会や人間についてより深く考える思想的変化が生じている。旧約聖書の中にも時間性に描かれた思想的変化がある。その一例として時間を主題にした2つのテキストから比較しておきたい。紀元前6世紀のバビロン捕囚期後に編纂された詩編90編の時間性と、ユダヤ教の諸書に含まれているコヘレトの言葉3章に描写された時間性である。コヘレトの言葉は、ソロモン王が著者であるという体裁になっているが、KRÜGERの研究では紀元前3世紀末から紀元前2世紀前半頃に成立されたと考えられている²³⁾。コヘレトの言葉3章は詩編90編と異なり、時間を通して格言が記されている。時間を表す単語に、一定の時間、期間を表す「時間 (תָּוַר)」と、単位としての「時間 (תָּוַר)」が書かれている。

「תָּוַר」は、「時点」「回」「期間」を表す単語で、「いつ？」という問いによって出来事の状況の結果示す場合に使用される単語である²⁴⁾。原義は「～のための（一定の）期間」を意味する。JENNIは「תָּוַר」を語彙上、次に挙げる3つに語義分類している²⁵⁾。1. 「時点」、2. 「一定の期間」、3. 「何かのための時」である。1. 「時点」を示す「תָּוַר」は、何か決まった時点や期間を示す単語

21) 野本真也（共著）『総説旧約聖書』日本基督教団出版局1984年P85

22) vgl. OTTO, *Der Gott des Alten Testaments*, Teil 1, Göttingen, 126f.

23) vgl. KRÜGER, *Kohelet (Prediger)*, BK Sonderband XIX, 171.

24) vgl. KRONHOLM, תָּוַר: ThWAT VI, 467f.

25) vgl. JENNI, *Die hebräischen Präpositionen*, Die Präposition Beth, Bd. 1, 25.

で、詩編90編に記されたような「日 (יום)」や「日々 (ימים)」のように、「どのくらい続くのか？」という問いに対する時間の長さや、継続する時間を示すものではない。2. 「一定の期間」を示す「עַתָּה」は、何かすでに見分けのついている、または特定のための時間であり、すでに確認した時間を示す。この場合には「始め」と「終わり」が明確になっている時点を表現する場合に使う。3. 「何かのための時」とは、コヘレトの言葉3章2節から8節に書かれている「עַתָּה」の分類である。これはコンテキストにおいて、現実の内容やリアリティーを示す。コヘレト3章1節に「何事にも時 (מָוֶז) があり/天の下の出来事にはすべて定められた時 (עַתָּה) がある」と書かれている。コヘレトの言葉3章1節には「עַתָּה」と並行して単位としての「מָוֶז (時間)」という時間を示す単語も記述されている。この「מָוֶז」は旧約聖書では4回記載されている(コヘレトの言葉3章1節, エステル記9章27節, ネヘミヤ記2章6節, シラ書43章7節)。旧約聖書のアラム語テキストには9回使用されており、ダニエル書に「期間」「期日」「日付」「(計画的な) 確定した時間」を表す単語として使用されている²⁶⁾。後期ユダヤ文書において使用されることから、「מָוֶז」は「עַתָּה」の派生語であるとされる²⁷⁾。コヘレトの言葉3章において、人の一生の有限性は「עַתָּה」の時間性を通して、2節と8章5節以下、9章8節以下にも描写されている。これらの箇所において、「עַתָּה」は直接的に人間の有限性の生における死の時点を表している。コヘレトの言葉3章は、死生観に表現された一生うちの「確かな時点 (死)」を意識した格言の中に「עַתָּה」が表されているのである²⁸⁾。

詩編90編に表された時間性は、詩全体を通して、コヘレトの言葉に表されているような「確かな時点」を示す言葉は見当たらない。「日」から「年」そして「継続」へと時間的な長短を示す言葉はある。詩編の時間性は本質的に「リズム」として捉えられ、昼夜のリズムは週のリズムへ、週のリズムは月のリズムへ、さらに年のリズムへ、また安息日のリズム、ヨベルの年へと移行するのである。詩編90編は神の存在を「果てしない時 (עוֹלָם)」や「1000年 (אלף)」という言葉によって、神と人との隔たりを知覚し、人は数えられ得る短い人生を歩む教えを通して死生観が描かれている。詩編における死生観は、人間の魂が不滅であるという思想は基本的にはない²⁹⁾。創世記3章19節のように、あくまで人は塵から創造され霊を吹き込まれたことによって生きる者となり、神がその霊を取り戻されたときに、人は死に塵に戻ると考えられている。詩編90編3節でも「塵に戻す」という表現があるが、そうした死の認識を共有している。人の死は「夕べにはしおれ、枯れていく」(6節)ように自然秩序の中で死を予期しなければならないことを、こうした比喻を通して表現されているのである。それゆえ人の一生は、この地上で与えられた肉体のみであり、人生をしかと見つめる「私たちの日々を数える(12節)|知恵の心を与えてほしいと願うのである。その意味で詩編90編は、死後に向けられた内容ではなく、今の生きる命への詩歌であると言える。

26) vgl. JENNI, *נַעַר Zeit*: THAT II, 375; GRETTLER, *Zeit und Stunde*, 164.

27) vgl. JENNI, a.a.O., 384.

28) vgl. GRETTLER, *Zeit und Stunde*, 172.

29) 詩編16編, 14編, 73編などの時代が比較的後期の詩編作者は、死が最後であることを否定する死生観もある。新約聖書は、ヨハネによる福音書3章16節, ローマの信徒への手紙6章23節のように、イエス・キリストを通して与えられる永遠の命が中心テーマとなる。

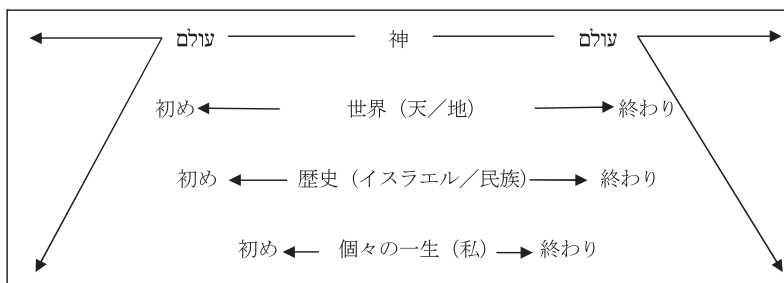
以上のように詩編90編とコヘレトの言葉3章を通して、成立時期や著者の違いだけでなく、時間性を表す言葉の使われ方による意味の違いにも、ヘレニズム文化を通して死生観に変化が生じていることを指摘しておく。

6. おわりに

旧約聖書全体に描写されている神と人の時間イメージ図として、HARTENSTEINの研究を紹介しておく。それは、1. 神の時間性 (עולם), 2. 天地創造の時間性, 3. 歴史観 (イスラエル史/民族史), 4. 人の一生である。こうした時間スケールは、詩編90編の時間性にも描かれている。詩編は神を表現するとき、永遠という無時間概念で表現するのではなく、「見渡すことができない果てしない継続」または「限りない持続」としてオラーム (עולם) を通して表している。「עולם」は、「神の大きさ」とも表現でき、各詩編の結びにある神を賛美する頌栄にも記されている。「神はעולםである」ということは、世の主としての神の褒め称えであり、見渡すことのできない果てしない大きさ、限りなき神に惹かれる躍動を意味している。

詩編に記されている詩歌の特徴は比喻である。読み手はその意味を明確にする努力をしながら、思いをめぐらし、その意味を理解する。比喻は私たちが感覚で捉えたものや、心に浮かんだものを具象するはたらきがある。詩編は物事の対象を叙述するにとどまっではない。詩編に記されている多くの比喻は、時代を越えて現代を生きる私たちに、同じ命を持つ者への祈りを伝えている。

Grafik HARTENSTEIN³⁰⁾ : Die Zeit Gottes umgreift die menschliche Zeit



参考文献

※書名、雑誌名の省略は、S. M. Schwertner, Theologische Realenzyklopädie (TRE), Abkürzungsverzeichnis, Berlin - New York, 2. Aufl. 1994に基づく。

野本真也 (共著) 『総説旧約聖書』日本基督教団出版局1984年

GRETTLER, T., 2004, *Zeit und Stunde. Theologische Zeitkonzepte zwischen Erfahrung und Ideologie in den Büchern Kohelet und Daniel* (TVZ), Zürich.

DOHMEN, C., 2000, *Exodus 19-40* (HThK AT), Herder, Freiburg/Basel/Wien.

GUARDINI, R., 1987, *Vergänglichkeit. Psalm 89 (90)*, in: Ders. (Hrsg.), *Weisheit der Psalmen: Meditationen*. 2.

30) Vorlesung »Theologie des Alten Testaments«, WS 10/11, an der LMU München. vgl. ThLZ, 137, 2012.

- Aufl., Mainz, 1987.
- HARTENSTEIN, F., 2008, *Das Angesicht JHWHs. Studien zu seinem höfischen und kultischen Bedeutungshintergrund in den Psalmen und in Exodus 32–34 (FAT 55)*, Tübingen.
- HARTENSTEIN, F., 1997, *Die Unzugänglichkeit Gottes im Heiligtum. Jesaja 6 und der Wohnort JHWHs in der Jerusalemer Kultradition (WMANT 75)*, Neukirchen-Vluyn.
- HOSSFELD, F. -L., ZENGER, E., 2000, *Psalmen 51–100 (HThKAT)*, Freiburg/Basel/Wien.
- JANOWSKI, B., 2006, *Konfliktgespräche mit Gott. Eine Anthropologie der Psalmen*, 2. Aufl., 163.
- JENNI, E., 1952, Art. עולם *Ewigkeit*, THAT II, 228–243.
- KAISER, O., LOHSE, E., 1977, *Tod und Leben (BiKon 1001)*, Stuttgart.
- KOCH, K., 1988, *Qādām. Heilsgeschichte als mythische Urzeit im Alten (und Neuen) Testament*, in: ROHLS, J., WENZ, G. (Hrsg.), *Vernunft des Glaubens. Wissenschaftliche Theologie und kirchliche Lehre*, FS W. Pannenberg, Göttingen, 253–288.
- KRONHOLM, T., 1953, Art. נח, ThWAT VI, 463–482.
- KRÜGER, T., 2000, *Kohelet (Prediger) (BK Sonderband XIX)*, Neukirchen-Vluyn.
- KUROYANAGI, Y., 2013, *Vergänglichkeit des Menschen und Gottes Zeit: Die Theologie der Zeit im Vergleich mit Kohelet*, Diss., München.
- OTTO, K., 1993, *Der Gott des Alten Testaments. Theologie des AT 1: Grundlegung*, Teil 1, Göttingen.
- WILLI-PLEIN, I., 1997, *Am Anfang einer Geschichte der Zeit (ThZ 53)*, 152–164.
- WAHL, H. -M., 1994, *Ps 90, 12: Text, Tradition und Interpretation (ZAW 106)*, 116–123.
- WOLFF, H. W. 2002, *Anthropologie des Alten Testaments*, Bd. I, 7. Aufl., München.
- ZENGER, E. (Hrsg.), 2008, *Einleitung in das Alte Testament*, 8. Aufl., Stuttgart/Berlin/Köln.

